

谷中七福神の内

長安寺

壽老人人



谷中七福神 長安寺

壽老堂由來

その一

むかしの谷中附近は、西に富士、東に筑波を眺める静かな丘陵地帯であり、春は桜、秋にはす、きに映える名月と、四季を通じて文人墨客の清遊の地であり、早春には、梅花にたわむれる鳶の名所でもあった。

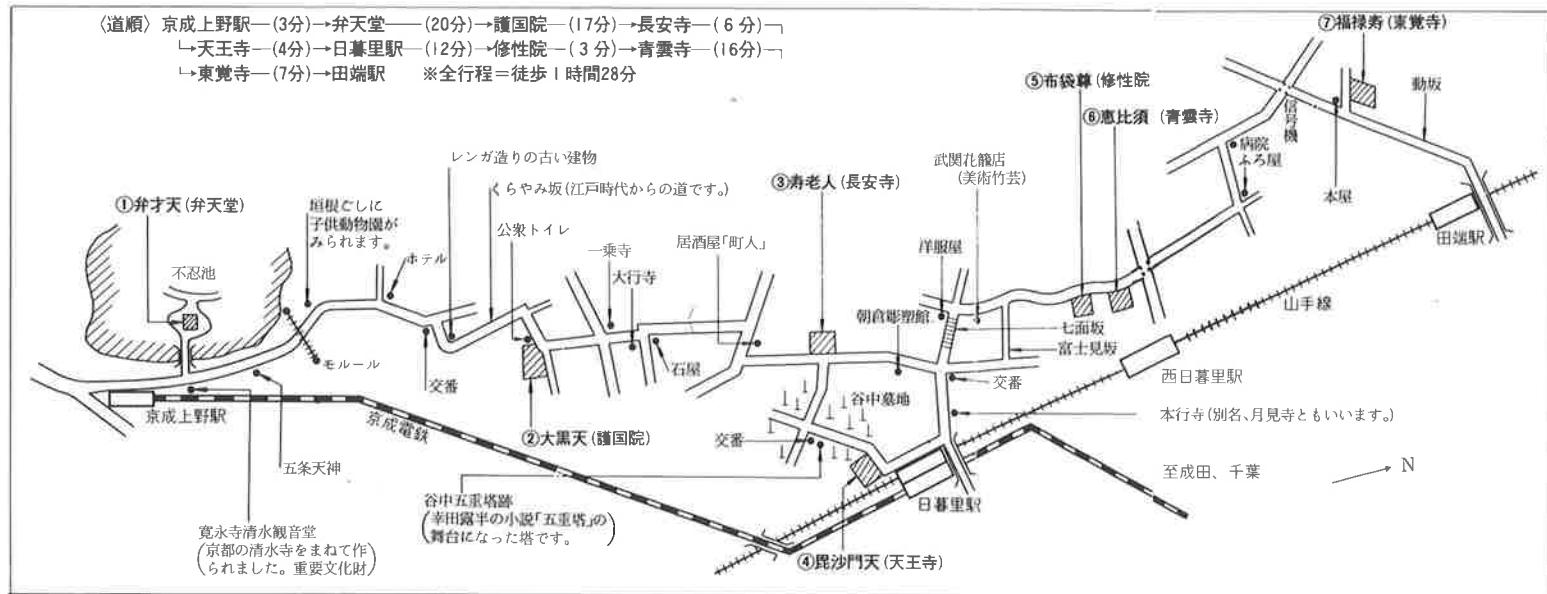
いつの頃からか、この鳶の初音にさそわれて、行脚の老翁が、この地にとどまるようになり、長安軒と名付けられた小さなお堂をたて、壽老人（徳川家康の納めたものという）の尊像を安置して給仕していた。たまたま老山和尚（長安寺開山・寛文九年）が、日暮れにこのあたりを通りかかり、一夜の宿を長安軒にもとめた。その夜、老翁が

和尚に語るには、『前々から、ご立派な方に、この小さなお堂ではあるがお譲りしたいと思つていたところ、幸いなことに今夜あなたがこ、にお泊りになつた。どうぞこのお堂をお守りしていたゞきたい。この堂内に安置してあるのは、七福神の内の南極星壽老尊人で福德自在の

神である。即ち、いのち長くして諸願を果す福、父母に孝行の福、子なき人には子孫繁栄の福、病人には諸病平癒の福、又戦火もなく財録増進の福、農家には五穀成穫の福、商人には商売繁昌の福を授け与える神である。このことをよく衆生に教えさとして、祈念するようにす、めていたゞきたい。

そもそも、この里は、不忍の岡に弁才天あり、護国院に大黒天あり、感應寺（現在の天王寺）に毘沙門天あり、当長安軒に壽老人あつて、将来は、これに基いて七福神を祀る地となるであろう』と（現在、日暮里青雲寺に恵美壽神、修性院に布袋尊、田端西行庵（東覚寺）に福録壽が祀られている）時に枕辺にひびく鐘の音に驚かされ、和尚が頭をあげてみれば、一睡の夢であつて、起きて老翁を尋ねさがしたが、何處へ行つてしまつたか、見あたらなかつた。やむをえず和尚は、長安軒に止まるところになつた。

その後、年去り日は移つて明治元年の夏、徳川家恩顧の旧家臣等が東叡山へたてこもり、新政府軍に対しても反乱を企て、いた。この時、壽老人を祈念していた二・三人達の夢中にお告げがあつて、このあたりは、すべて戦場となり、火災も発生するであろうから、婦人子供老



江府中谷安輝寺

人たちを早く避難させなさいと教えられた。果して同年五月十六日（旧暦）政府軍、浪士軍の戦端が開かれ、この谷中附近一帯は陰惨な戦場と化し、处处灰燼となつたけれども、住民は辛くも難をのがれた。戦火鎮静ののち、人々はこの靈夢でのお告げを尊として、みな礼拝するようになった。

（明治初年発見した由来による）

その昔、道灌山の西裾を水のきれいな藍染川が流れていた。そのほとりに老母と一人息子が住んでいた。息子は近在でも評判な孝行者だが、それに反して老婆は大変強欲で世間のつまはじき者であつた。それでも縁あつて息子に嫁がきた。しかも息子同様心がけの良い嫁であつた。二人の馴れ染めは、信心のあつい寺詣りからであつた。やがて二人の間に可愛い赤ちゃんが生まれた。

『赤ん坊なんか、うるさくてしようがない。私なんかも、あの息子が生まれたその日から背負つて山仕事に出かけたもんだ……』との老母のやかましいグチから逃れるように、嫁は生まれたばかりの赤子を背負つて野良仕事へ出かけて行つた。

『おゝ、よし／＼不思議なことに、その日から白い髪のお爺さんが、どこからともなく現われて、嫁に代つて赤ん坊の面倒を見てくれるようになつた。そして、そのお爺さんは子守りをしながら強欲な老婆の処に行つては、いろいろと世間話をするようになつた。その話は老婆の気持ちを和らげて、やがて進んで孫の赤ん坊の子守りをし、嫁ともむつまじくなつた頃、白髪の老人はパツタリ姿を見せなくなつた。

そして正月のこと、近所の人達と連れだつて七福神めぐりをして、長安寺の壽老人の前に立つたとき、老婆がまずビックリして大声をあげた。『アッ、この方だ。この人だよ』嫁も亦『アッ、このお爺さんだ』、すると柔軟な壽老人の像がニッコリとして、

『お婆さん、嫁さんや孫さんは貴女のかけがえのない宝ものじや、大事にしなさいな』ハツキリ耳に聞こえた。

壽老人ご詠歌

慈悲ふかし

仁徳をなす

おののの
しそんえながく
じゆふくあたえん

長安寺・略伝

◆長安寺
臨濟宗 妙心寺派。寬文九年(西歷一六六九年)

老山和尚により開創、八代翠巖和尚、現在の堂宇を再建
今日に至る。本尊は、千手觀世音菩薩で、西国三十三番
札所の内、二十二番惣持寺の写しである。

左脇に鹿を従えた座像である。

◆狩野芳崖塾
当たる墓地内にあり、芳崖先生は文政十一年（西暦一八二八年）一月十三日山口県長府豊浦藩の絵師諸葛清泉の子として生まれる。幼名を幸太郎といい、十九才の時、藩の留学生として上京して狩野勝川の門に入り狩野派の絵を勉学すること十年、橋本雅芳と共に狩野画塾の双璧と称されるほどの技量を身につける。三十才の頃、郷里に戻り倒幕の戦争に加わつたりしますが、人のすゝめもあって、夫人ともども上京して絵の勉強をつゞける。しかし、在来の因習にとらわれ先人の模倣のみを事としていた狩野派の絵にあきたらず、しばく新

この板碑造立は、死者の冥福を祈る追善のもの、自分
の死後の安樂を願う逆修のもの、或は仏を讃えるものな
ど色々ある。殊にこの時代は、蒙古襲来をはじめ戦さに
あけくれした時代で、出征した父、夫、息子たちの武運
長久を祈るものや、戦歿した人々の追善のものが多い。
○建治二年四月（一二七六年）北條時宗の頃、阿弥陀仏
○弘安三年正月（一二七八年）北條時宗の頃、阿弥陀仏
○正安二年一月五日（一二〇〇年）北條貞時の頃、上部欠
損。建立者比丘尼妙阿。

◆**鎧細工** 本堂中央の上部壁面に鳳凰、奥両袖壁面に昇龍、降龍があり、いづれも三代目伊豆の長八作、白壁の下絵の上に立体的にしつくいを塗り上げていったもので、左官屋の余技ともいえるが、現存するものは少い。



圖內案拌巡下詣神福七



らしい手法を使つたため破門寸前にまで至る。勿論世間からも認められず約二十年間は貧困と戦いながらも絵をかきつづける。

明治十七年（一八八四年）展覧会に出品中の絵が、たまたま東京大学教授として来日していた米人フェノロサに認められてから世の脚光をうけるようになり、美術復興の時流にものつて、其の後死に至るまでの五年間、橋本雅芳、岡倉天心、フエノロサ等と共に美術学校（芸大）の開校に奔走しますが、明治二十一年（一八八八年）十一月五日、開校を待たずに死去する。行年六十一才。絶筆として重要文化財に指定されている悲母觀音があります。

◆板碑 扁平な細長い石の上部に二、三条の横線を刻みその上は山の形に尖らせ横線の下に仏像又は仏を表す梵字を刻み、年月日、法名、造立の趣旨などを記入した一種の石塔婆である。この板碑の流行した年代は、古いもので西紀一二三七年、新しいもので一五九八年、大体鎌倉時代から室町時代末期までで、分布は、山形、徳島に二、三ある以外はほとんど関東地方特に東京埼玉に多く現存し、その材質は秩父産の緑泥片岩俗に青石と呼ばれているもので、年代の古いものほど大きく、最もさかんに造られた室町時代のものは大体一米以下のものが多い。